


version d'évaluation

このファイルは P.P.Content Corp. 社刊行書籍のトライアル版です。このファイルは、読者が当社刊行図書の購読を検討する場合に限ってのみ利用できます。一般に広く無料で公開されているわけではありません。このファイルおよびこのファイルに入力されている電子的データの著作権は、著者ならびに当社に帰属します。あなたがこのファイルを第三者に提供すること、公開すること、頒布することは禁じられています。

DELTA

Callas Cenquei Femmes #2 Delta / Edition de Librairie P.P.Content Corp.

Callas Cenquei Femmes #2 Delta / Le Baiser de la Mort




この海に終わりがあることをわたしは知っている。でも言わない。あの空に限りがあることをわたしは知っている。でも言わない。夕映えにかすむ希薄な空を染めて遠く沖合いに沈もうとするわたしたちへスペリアの太陽は、本当は太陽ではなく、太陽の廃墟だということ。わたしは知っている。でも言わない。言わないのは禁じられているからではなく、誰もわたしに聞こえないから。訊いてくれたら話してあげるかもしれない。永い永い航海の果て、弔いの歌もなく死んでいった男たちのことをわたしは言わない。もはや忘れられて久しい故郷の

歌と残された子供たちの旅路の行方をわたしは言わない。この海の終わり、すでに暮れ果てた空と海とがあおおと抱き合う水平線の彼方に記された、誰にも読めない絵文字のことをわたしは言わない。枯葉が降り積もり、雨に流れ、気の遠くなるような孤独のなかで、静かに時が舞い落ちるように、薄い記憶の切片がわたしのなかに降り積もる。言うなれば、わたしは記憶にかしづく女なのだと思う。多くを知りすぎた女だと。本当はどうでもいいような思い出にとらわれ、その不毛な写しに身を捧げているのだと。でもなぜだろう。わたしを膝に抱き上げ、遠く悲しげな瞳で見つめる男のことをわたしは知らない。

死んだ季節。ヘスペリアの夏。わたしたちのヘスペリアに四季の営みはない。空々しくどこまでも空疎な写しでできたヘスペリアには、よくできた季節の写ししかない。あるいはすでに廃墟と化した季節の表徴しかない。自然の廃墟。わたしたちの夏。ヘスペリアの死んだ季節。朝を迎える前には必ず立ち込め、かすかに雨となつて降る霧。ようやく明け染めたばかりの夏のおもかげ。遠くから聞こえる潮騒。鳴き交わす鳥たち。夏なのに誤つて降る雪。ヘスペリアの夏。死んだ季節。この死んだ季節のなかで、わたしはすでに死んでいる。あるいはわたしはあらかじめ存在しない。または廃墟の生

とでも呼ぶべきものをわたしは営んでいる。あるいはあらかじめ死者としてこの世に生を享けた。廃墟の生。死者の生。喩えるならば、わずかばかりの愛のために彫像に変えられた可愛そうな娘のように、あるいはあまり確かでない罪のために僻遠の地に流された哀れな流刑者のように、ながながしく、永遠とも思われる時間を、よるべのない孤独と内省と理由のない嗟嘆にゆだねる生活がわたしの生のありようだ。まるで、と鏡を見つめてわたしは思うだろう。埋葬の地を忘れてさまよう亡霊ね、と。生きているのに死んでいる人みたいと。そして、幾許かの軽蔑をこめて続ける。でも、死者よりも魅惑的だわと。




ルパナーレの街角でこのあいだおまえを見たという。わたしは肩をすくめて笑うだろう。きつとそれはわたしではないわと。もはや憶えていらっしやらないでしょうけれど、ずいぶん昔にあなたとよくお会いしましたと男がいう。わたしはその項に指をこらせて言うだろう。だれか知らない女と間違っでいらっしやるのでしよう。ヘスペリアの女たちはみなどこかよく似た面影をしているからと。あるいはこうだ。ルパナーレの女たちはみな、まるで交配しないで生まれてくる子供たちのようにうりふたつなのだ。わたしたちのルパナーレでは一週間前のことを誰も憶えていない。昨日のこと

すら憶えていない。一年も前のこととなるともう誰の記憶のなかにもない。ただ、街角の数だけ、部屋の数だけ女がいる。出所のあいまいな女たち。いつこの街に来たのかもわからない女たち。いつ出て行ったのかわからないまま何度も帰ってくる女たち、住み着いてからどれほどの時が経過したのかもわからない女たち、つぎつぎと女を乗り換え、自分の女の名前すら忘れてしまった男たち。数をかぞえるということがこれほど意味をなさない場所もない。わたしたちは名前を交換し、肖像を交換し、生のありようや欲望のかたちまでも交換し、もはや誰が誰かすらわからないまま、他人の夢の中に暮らしている。


たとえばわたしの記憶のなかにたたまれていくつも箱を開け、水に溶けてひらく花びらのようにゆるやかにその襞をほどいてゆくならば、わたしの水浸しの箱のなかには、季節はずれに降る雪とともに、いくつもの同じ街路の繰り返しからなるヘスペリアの地が静かに姿をあらわすだろう。古びた建物、嵌め殺しの窓、過去へと抜ける細い間道、必ずしも今日の隣に明日があるわけでもなく、また昨日の隣に今日があるわけでもないような、いくつものうんざりする、同じ街路の繰り返しからなるヘスペリアの街。街角に反響するこだまが呼び交わし、悩ましい姿を具えたように街路にたたずむ女

たち。この街は、わたしの記憶の合わせ鏡のなかに横たわる鏡像の街なのか、それともヘスペリアの地のかたわらにわたしの記憶がエコーのようにたわむれているのか、ときどきわたしは見分けがつかなくなる。西のはずれの死者たちの迷宮とわたしは言うかもしれない。または最果ての地の陽炎の砦と。だからと言うわけでもないのだろうが、ルパナーレの人々はこの街を訪れる人々にこのように語りかける。きのう見た夢の続きを見たいのならばルパナーレにいらつしやい。この世のものとは思えない美貌の女たちが秘められたヴェールをほどき、あなたの記憶の襞をゆるやかにひもといてくれるでしょう、と。



窓から見えるエリュティア川はゆるやかに蛇行して海へと向かうが、上流はない。はるか遠くに山並みが見え、麓には葡萄畑が広がるが、向こうへと抜けることはできない。左手には枯葉を落とさない樹木からなる深い森が広がるが、そのなかに分け入ることは誰にもできない。そこは彼方と手前の境界地帯、延々と連なる行き止まりの場所だ。いつの日かあのエリュティアの街で暮らせるときが来たら、とヘスペリアの人々は言うだろう。種を撒き、植物の世話をし、まるで幼い恋人にするように葡萄の樹を大切に育てたいものだ。しかしながら川に架かる橋を渡った者はいない。向こう岸に泳ぎ

着いた者もない。その地に足を踏み入れた者すらいない。そこは国境という名の行き止まりの場所だ。あらゆる出口、出口という出口をいくつもの行き止まりで遮られ、内側へと折り目をかさねてゆく街、幾重にも襞をかさね、襞のなかに襞を折りたたんでゆく街、それがわたしたちのヘスペリアだ。わたしは言うだろう。ヘスペリアの悲劇とは彷徨と忘却の悲劇だと。みずからに課せられた使命を忘れ、歴史を忘れ、その因つて来るところをも忘れ、あてもなく彷徨する箱舟の悲劇だと。進歩の強風のただなかでたったひとつのカタストロフィによって彷徨と退行への耽溺を余儀なくされた箱舟の悲劇だと。



お父さまはわたしにいたずらをなさつた。決して癒えることのない傷をわたしの肌に残してしまわれた。どれほど拭い去ろうとしても拭い去ることのできない傷、わたしをいつも落ち着かなくさせる不吉な徴し、お父さまの理不尽な愛の証し。まるで罪深い愛のしるしに男たちがその名を女の肌に刻み込むように、お父さまはわたしのからだに不気味な愛の傷を無理強いしてしまわれた。不道德な愛、宿命的な来歴、根本的な欠落と避け難い運命、そういうもののすべてが、鏡に背を向けて裸になると、虫食いの果実の虫のようにわたしの眼を掴まえて離さない。ある不幸の表徴。わたしの呪わ

れた部分。わたしなりの原罪。しかしながら、この不幸の表徴がわたしを証明する唯一の証しであるというのは何と皮肉なことだろう。まるで虫食いの林檎が、他でもないその虫によって、果実であることを証明されているようなものだ。だから、とわたしは思うのだろう。わたしの心臓はときめくことを知らないのだと。わたしの肌は感じることをしないのだと。わたしの唇は固く結ばれたまま愛の輝きから永遠に隔てられているのだと。わたしは思う、おそらくはこうだと。ある日、見分けがたい群れのなかに不実な神が現れ、その口辺に不気味な微笑を浮かべて肩をすくめたときにわたしは生まれたのだと。

口づけをしないこと。ドレスを脱がさないこと。みだりに部屋を汚さないこと。いくつかの約束とともに脚を広げて机の上に座り、命じられるままわたしはポーズを取るだろう。男の手を取り、髪に触れさせてみたり、胸を触らせてみたりする。脚のかたちを見せたり、項に指をすべらせてみたりする。そして一連の気の遠くなるような繰り返しのもとで、わたしはそこで行われたことのすべてを忘れてしまうだろう。記憶を捨て去ることを選ぶわけでもなく、わたしは忘れてしまう。わたしたちの病である内省の悪癖に耽溺することから身を守るため、わたしたちはすべてを忘れてしまう。髪の色

も、瞳の色も、交わした会話も、すべて忘却の淵に捨ててしまう。何と言えはいいのだろうか、愛というものの不幸をわたしは知らない。悲しみを感じることもなければ喜びを抱くこともない。まるで季節はずれに降る雪のように、空白の時間が降り積もることもなく、溶けてゆく。そして、男たちも忘れてしまう。わたしの肌に手を触れて忘れてしまう。さまざま不都合や、見過った希望、届かなかった訴求など、彼を苦しめてやまない苦痛を、男たちはわたしの季節はずれの雪のなかに忘れてゆく。きれいさっぱりと。あとかたもなく。つまるところ、とわたしは思うだろう。わたしは忘却の天使なのだ、と。

ルパナーレを出て今日はどちらまで。そう訊かれたらわたしは答える。お父さまの家の方へ、と。お父さまのお屋敷の方へ。決してオルコット・モーガンのところへとはわたしは言わない。父が亡くなってすでにかなりの時が経ち、様変わりしたお屋敷にはもう誰もいなくなってしまうけれど、わたしは父の家へと向かう。そしてかつての面影もないそこ、沢山いた使用人や留守をあずかる者もないそこで、わたしはひとりシャワーを浴び、ベッドに横たわる。そしていくつかの決まりきった仕事をし、再び身づくろいをする。たったこれだけのことで、わたしは全く新しいデルタに生まれ変わるの

だからとても不思議だ。気分がすっかり新しくなり、何もかもが新しくなり、大きく背伸びをして、わたしは生まれ変わったと言ってみる。思いつくまま、普段はしないようなことをしてみたりする。ゆるやかに湾入するヘスペリアの浜辺を靴を脱いで歩いてみる。波に洗われて足跡が消えてゆくさまを物思いに耽って眺めているふりをしてみたりする。ドレスの裾を持ち上げ、すこしだけ足を涵して、冷たいなどと言ってみる。誰もいないのに、ふざけて誰かに追いかけられているようなふりをしてみたりする。あまりはしゃぎすぎるとドレスが濡れますよ。声に驚いて振りかえると男がいた。ヴィヨンだと言った。


へスペリアの浜辺に寄せる波の美しさについて男はわたしに語るだろう。明けたばかりの夜の静けさと静寂をはらんだ海のひびきについて、男はわたしに語るだろう。朝もやに包まれたエリュティアの山並みの美しさについて。朝の霧が晴れたかと思うと静かに降り出す雨のやさしさについて。男はわたしに語るだろう。遠く瞳をさまよわせ、男はわたしに語るだろう。雨音の向こうに浮かび上がるアレトウーサの森の豊かさについて。しばしば季節はずれに降るへスペリアの雪のはかなさについて。海を見晴るかす海辺のテラスに腰を下ろし、男はわたしに語るだろう。遠くにあるものの近さについて。

遠くに思われるものの限らない近さについて。見晴るかす海の果てしない広がり、その向こうに横たわる名付しがたいものへの畏敬について。空の果てから水平線を越え、まだ見ぬ街へと飛び立ってゆく鳥の航跡が残す未来について。男はわたしに語るだろう。いつかエリュティアの街で暮らす日のことを。若くして亡くなった友人と彼の残した形にならない遺産のことを。どれほどの苦難があっても失われることのない希望のことを。決して遠くはないその日のことを。わたしは言う。もし、あなたが、わたしのことを気に入ったのならわたしを抱いてもいいけれど、わたしの肌には手を触れないでほしいと。

失敗に終わったヘスペリアの植民について。

あるいは冷たい雨のように降る灰について。失われてしまった未来と不確かな希望の行方について。わたしは男に言ったのだろうか。それとも男に言うのだろうか。永遠というものの終焉について。あるいは果てしないものの終わりについて。または近くにあるものの限りない遠さについて。遠くに思われるものの揺るぎない遠さについて。わたしは男に言ったのだろうか、まるで希望を失った人みたいに。あなたが美しいというエリュティアの山並みは、あなたがその手に触れるやいなや、水鏡に映る影のようにはかなく消え失せてしまうだろうと。いつ

かはその眼で見たいというエリュティアの街並みは、国境を渡ろうとするやいなや、行く手という行く手を遮られ、足を踏み入れることすらできないだろうと。枯葉もなく、その下でやすらう虫たちもいないアレトウーサの森に雨は降らないと。嵌め殺しの窓に映る影に眼をうばわれている人には、なにかを手に入れることはもちろん、なにひとつ手に触れることすらできないだろうと。わたしは言うのだろうか。わたしは言ったのだろうか。その男に対して。ヴィヨンという名の男に対して。せめてもう一度だけと言う男に対して。来週、友人に別れを告げたあとならば、少しだけ会う時間があるかもしれないと。



イレーヌのことなんてもう誰も憶えてやしない。ソフィアのこと誰も憶えてなんかいやしない。アナの埋葬の日取りを告げに来た背の低い男のことをわたしは知らない。ヘスペリアの旧市街は祝祭でにぎわい、色彩の希薄な大通りは空疎な人込みでさざめいているが、わたしは特に親しかつたわけでもない隣人の弔いに参列し、彼女の死に花を手向けるだろう。アナの思い出のために。イボンヌの思い出のために。ベルナデットの思い出のために。おそらく数えきれないほどの花束をわたしはこの地に捧げてきたにちがいない。あなたのことを忘れないわ。きっとあなたのことをおぼえているわ。そ


のような約束をわたしはしない。折りに触れて匂いたつような思い出とはわたしは無縁だ。整然と箱を積み上げ、荷札をつけてゆくような思い出がわたしにはふさわしい。いくつもの箱、塩漬けの箱、決して開かれることのない箱、紙くず同然の箱、なかに何が入っているのかすら忘れてしまった箱、その集積がわたしだ。わたしの思い出は塩漬けの箱からできているとわたしは言うだろう。わたしの身体は空疎な身体の断片から出来ているとわたしは言うだろう。わたしの美貌は自然の廃墟からできているとわたしは言うだろう。だからとわたしは思う。ヘスペリアの死んだ季節にわたしの美貌はよく映えるのだと。

頼んでもいない飲み物がテーブルに出されたときの振舞い方をわたしは知っている。給仕をしてくれた男にチップを渡すときの振舞い方をわたしは知っている。通りすがりにさりげなく愛を告白されたときのあしらい方をわたしは知っている。要するに育ちのいい女ということなんだわとわたしは思う。旧市街の大通りに面したカフェに腰をおろし、溜息をつきながら、もの思わしげに片肘を付くときの表情の作り方をわたしは知っている。退屈を持って余して隣の席の男に声を掛けさせ、その話にも興味深そうに相槌を打つしなの作り方をわたしは知っている。通りを行く人のまなざしを集めて脚を組みか

えてみたり、用もないのに身を屈めて物を拾ってみたりするときの身のこなし方をわたしは知っている。要するに嫉の悪い女ということなんだわとわたしは思う。夕暮れまでには必ずと約束したヴィヨンという名の男を待つて、十分がたち、二十分がたち、わたしはもはや見られることにも倦き果ててしまった。やはりこういうものさ、こういうものなんだわ、と帰り支度をしはじめた頃、とうに暮れ果てた日覆いと日覆いの翳のあいだに、祝祭でにぎわう街角の人込みを縫って、急いで駆け付ける男の姿を見出したとたん、なぜかしらわたしはふと、わたしの前で時が立ち止まることもあるかもしれないと思った。

逃げ惑う人の群れをわたしは見なかった。抱き合って震える人々をわたしは見なかった。泣き叫ぶ人の群れをわたしは見なかった。すべては固い殻で被われた木の実の遠くで風が吹き、その落下する方向がほんの少しずれただけのことだ。すこし右に、すこし左に、あるいはとんでもない方向に。固い殻に守られた胡桃の果実にとつてみれば、その鎧戸の外で何が起きようと、たとえそれがどんなことであろうと、致命的な出来事であろうと知るすべもない。ただ時の熟するまま、殻の内奥で壁を深くして熟してゆくのだ。広大な邸宅で養われた孤児しごの娘のように人知れず蒼ざめて熟してゆくのだ。おし

なべてカタストロフのはじまりというのはそういうものだ。気づかないうちにささやかな出来事から事態は始まり、気が付いたときにはすでに手遅れになってしまっている。もはや手の施しようもなく。どうしようもないほどに。ヴィヨンの退屈な話に相槌をうちながら思いを彷徨わせていると、食卓の飲物を取ろうとしたヴィヨンの手と、テーブルの鞆に伸ばした手がふとした拍子にぶつかった。驚いて引込めるわたしの手を取り、ヴィヨンは微笑んで言った。冷たい手をしていると。温めてあげたいと。できることならば。わたしは言う。どうか体温が低いからといってわたしのことを軽蔑しないでほしいと。



雨だれの音に耳を澄まして物思いに耽つて
いる時間はとても幸福だとヴィヨンは言う。まだ明け切
らない薄明の時間に、遠くひびく雨だれの音に耳をかた
むけて、思いをさまよわせている時間はとても幸福だと
ヴィヨンは言う。遠くに落ちる雨だれのひとつひとつが
見えない波紋をひろげて、初めて大地に触れる水滴のふ
るえを自分の鼓動に伝えるのだと。遠くこだまする海の
ひびきが夜のしじまをわたって、砕け散る波の慄えを自
分の鼓動に伝えるのだと。ヴィヨンは言う。すべての音
はつねに新しいと。耳に触れるすべての音はつねに新し
く、ひとつとして同じものはないのだと。まるで同じ樹

になるたくさんの木の实が、見かけはどれほどよく似て
いようとも、その固い殻のひとつひとつに異なる時間を
実らせ、異なる種子をたくわえているように。ヴィヨンは
言う。実はあ有的时候、初めて君を見たとき、海辺で波
とたわむれる君を見たとき、僕は新しい知らせを聞いた
んだ、と。とても新しい、しかしながら胸の奥底にずつ
と眠っていた、あるいは眠っていることすら忘れてしま
っていた、とても懐かしい知らせを聞いたんだ。ヴィヨ
ンよヴィヨン、目覚めなさい。意地っ張りなおまえの固
い殻を破って目を覚ましなさい。新しい時間が始まりま
すよ、と。たぶんそれは発芽の知らせなんだと僕は思う。

わたしは知っているかもしれない。この男のことをわたしは知っているかもしれない。この男とこうしているこの瞬間を、知っているかもしれないとわたしは思う。この男の瞳、この声、この男の優しい息づかい、いつかどこかで、もしかしたらとても遠い昔に、一度だけ逢ったことがあるかも知れないとわたしは思う。わたしの記憶のなかに、この地でわたしが花を手向けてきた数かぎりない死者の面かげのなかに、あるいはわたしの塩漬けの箱に眠る、数かぎりない過ぎ去った日々の面影のなかに、この男に重なり合う影があるかもしれないとわたしは思う。このいまこのときに重なり合う瞬間

の痕跡がわたしのなかに眠っているかもしれないとわたしは思う。もしかすると、それはこの男ではなかったかもしれない。あるいはもしかすると、それはこのわたしではなかったかもしれない。それにもかかわらず、知っているのとわたしは思う。わたしは知っている、わたしは思う。テーブル越しに愛の言葉をささやく男は、やがて微笑んで言うだろう。どこかで逢ったことはないだろうかと。とても初めて逢ったとは思えないのだと。もしかしたら遠い昔に、君が生まれる前、僕が生まれる前、ふたりは仲の良い兄妹だったのかもしれないと。あるいは何らかの理由で生き別れた恋人だったのかもしれないと。

忘却と眠りに対する果てしない憧れのなかでわたしは夜を過ごすだろう。立ち現れては消えてゆくいつもの永遠を、わたしは夜の時間のなかで繰り返し見るだろう。塩漬けの箱を開け、固く閉じられた襷をひもとき、静かに浮かび上がる水浸しの街をわたしはひとり歩いてゆくだろう。いくつもの同じ場所、いくつもの同じ街路に、いくつもの時間が地層のように重なり、昨日の血痕と数年前の女たちの嘆きがいまだ生々しく街の外壁にこびりついている。乱暴な男たちの怒声と追われる者の足音が通りに静かにこだまする。そのなかでわたしはもうひとりのデルタを招いて、あるいはさしずめ今日な


らばヴィヨンという名の男を招いて、この塩漬けの街を案内してゆくだろう。ほら、ここがハワード家の広壮なお屋敷。見て、ここがデイエゴ・ナッシュの暗殺された場所。ここはミエーレとアンヌが密かに逢引きを重ねている安宿。気を付けて。振り向かないで。ラズロの密偵がわたしたちを見ているわ、と。そしていくつもの同じ角を曲がり、同じような通りを抜け、同じような外壁にわたしのからだをあずけて、ヴィヨンの項にわたしは腕をめぐらせるのかもしれない。そしてわたしには永遠に禁じられている愛というものの感情にからだを慄わせて、まるで生娘のように咽喉をのけぞらせるのかもしれない。

ジャガーが来た。不機嫌そうに窓を叩いてジャガーが来た。わたしは、またこの男に手ひどい懲らしめを受けるのだろうか。それとも手厳しい言葉を浴びせられるのだろうか。男は言う、うんざりだ。俺はもう疲れた、と。馬鹿な女の相手をするのに疲れたと。おまえに男を紹介してやることに疲れたと。おまえの面倒をみてやるのはもううんざりなんだと。ジャガーは言う。うんざりだ。昔はとでもこうではなかった、と。この男はわたしと同じだけ年老いている。この男はわたしと同じだけ落ちぶれている。この男はわたしと同じだけ失望を抱えており、わたしと同じだけ思い出に囚われている。

わたしたちはいわば同じ記憶を共有する兄妹のようなものだ。言葉を介さなくても心を通わせ合うことができる。双子のようなものだ。ジャガーは言う。おまえは愚かな女だと。いつも同じ過ちを繰り返してばかりいると。本当におまえにはうんざりだ、と。そしてわたしの手を取り、何も言わず乱暴にわたしを引き寄せる。わたしたちは、細い指先を幼い兄妹のように絡ませ合い、わたしたちにはしか許されない部分を静かに重ね合わせる。そして、わたしたちにはしか許されない口づけをして、ひそかに顔を見合わせる。まるで孤児院から逃亡を企てた兄妹が湿気た街の安宿で禁じられた逢引きをしているかのように。

禁じられていることと許されないこと、あるいは賢明な選択として俺たちならば避けた方が良く、と、こういうものの区別をおまえは付けなくてはならないとジャガーは言う。賢く生きる術というものをおまえは身につけた方がいいとジャガーは言う。いい加減、俺に見限られないうちにな。そう言い残してジャガーは消える。窓を開いて分厚く雲の垂れ籠めたルパナーレの街へと消えてゆく。うんざりだって。面倒を見てやっているだって。それはこっちの言う台詞だわとわたしは思う。ひとりでは何もできないくせに、と。わたしがいないと何もできないくせに。オルコット・モーガンのところに

だって出入りできないくせに。わたしは思う。あの男はあまりにも多くをわたしから奪いすぎる、と。多くを奪って、ほんの少ししかわたしには残しておいてくれない。ほんともうこれっぽっちしか。悲しくなるくらいに。それにしても、とわたしは思う。こういう日にはヴィヨンに会いたくないな、と。ヴィヨンの眼に触れるのがどこか恥ずかしいとわたしは思う。できるなら枯葉にひそむ小さな虫のようになりたいなとわたしは思う。膝を抱え、丸くなり、枯葉の陰に潜み、そしてわたしには与えられていない眠りというもののなかへ、あるいは忘却の彼方へと、人知れず落ちてゆけたらどれほどいいだろうか。



ヴィヨンに待ちぼうけを食らわせてから、
流れるように時が過ぎた。海辺で初めて会った日から数
えて四分の三月と三日が過ぎた。そのおびただしい瞬間
の克明な記憶は、たちまちのうちに整理され、何の感動
もなくわたしの塩漬けの箱のなかに収められてゆくだろ
う。西に張り出したもはや人の訪れることのない岬、そ
の上の絶えて火の灯ることのない見限られた灯台、嶮し
い崖の上の小さな街、わたしはヘスペリアの夏、冷たい
夏に相応しい無感動な女へと戻ってゆく。そして、どれ
ひとつとして変わらない古びた通りを抜け、あるいはど
れを取ってもひとつとして変わらない古びた建物の前を

通り、わたしは旧市街の寂れたホテルへと出向いて行く。
または隘路を抜け、いくつもの同じ角を曲がり、ところ
によっては城壁の間際まで迫り出したルパナーレの安宿
のひとつへとわたしは招かれて行く。そしてジャガーに
紹介されて来る男たちにつかのま魔法をかけて、永遠に
見果てぬ夢や尽きることのない苦惱、悩ましい嗟嘆とい
ったものを何の感動もなく処理してゆく。わたしはそう
して遠景にふさわしい女へと戻ってゆく。気配を消して
行き交う人の流れに紛れる。目立たないような装いをし、
街路の光景にまぎれる。カフェでは声を掛けられないよ
う、奥の席に座る。と、そこにいたのはヴィヨンだった。

しばらくわたしは気づかないふりをする。あるいはまるで知らないふりをする。おそらくは瞬く間に時が流れて、ヴィオンはわたしのかたわらで刻々と年老いてゆくだろう。額には深い皺が刻まれ、みずみずしい肌は生気を失い、細くしなやかな身体が冷たい飲み物のかたわらでたちまちのうちに埃と化してゆくさまを、わたしは知らないふりをして眺めるだろう。あるいは瞬く間に塵と化し、風にまぎれ、その痕跡すら留めぬありさまになってゆく様子を、わたしは気づかないふりをして眺めるだろう。ちょうどこれまでわたしがしてきたように、この冷たい塩漬けの土地で永らくわたしがしてきたように。

に。そしてもはや手の施しようもなくなってから花束を捧げる。デルタ。ヴィオンは大きな声でわたしの名を呼ぶ。デルタ。わたしに気づいて大きな声でわたしの名を呼ぶ。ヴィオンの細くしなやかな身体が弾むように動いてわたしの前に座る。瞳を子どものように輝かせ、優しい息づかいでわたしの手を取る。そして言う。よかつた。ヴィオンはわたしを見て言う。会えてよかった、と。とても心配していたんだと。急に身体の具合がおかしくなったのではないかと。あのとときとても冷たい指先をしていたからと。それを遮ってわたしは言う。ねえ、ヴィオン。あなたは本当の女を相手にしたほうがいいわ、と。

たとえば凍てついた土地をあてどもなくさまよう亡霊、あるいは悪い魔法使いに姿を変えられたお姫さま、そのようなものと頑なに思いなしている頭のおかしな女であったとしたらどれほどよかったことだろう。あるいは人知れぬ場所に繋がれて、来る日も来る日も見果てぬ夢を見ている気のふれた娘であったとしたら。わたしを掴んで離さないヴィヨンの手を解き、わたしは表通りへと出る。いくつもの同じ古い建物、どれひとつとして変わらないヘスペリアの街並みを抜け、人ひとりいない旧市街の寂れたホテルへとわたしは向かう。今にも崩れそうな階段で立ち止まろうともせず、踊り場で振

り返りもせず、わたしを追ってきたヴィヨンがわたしを攫ってどこかへ連れ去ってくれらるることなど期待すらしないで、その安宿の一室へとわたしは向かう。そして、思い詰めた表情をして待っている男にわたしは言うだろう。ドレスはどうか脱がさないで欲しい、と。あまり乱暴な真似はしないでほしいと。口づけは禁じられているから、と。しかしながら、男たちは、わたしに触れることよりも、わたしの手に触れられることを望む。わたしの裸を見ることよりもわたしに見つめられることを望む。わたしは男たちの思いつめた瞳を見つめ、その額に軽く手を触れ、静かに瞳を閉じて、やがてわたしは雨だれになる。

わたしはやがて雨だれになる。遠くひびく波間に落ちる雨だれになる。深い緑を茂らせた樹の枝をつたう雨だれになる。枯葉をつたい、蜘蛛の巣をつたい、緑をつたい、やがて夜の深いしじまに落ちる雨のしずくなる。そして熱を帯びた子どもの額に優しく手を添えるように、わたしは男たちの額に冷たい指をさまよわせ、思いつめた表情で見つめる彼らの瞳をそつと瞑らせる。やがて夜半に落ちる雨だれとなり、間遠にひびく潮騒となり、吹きまとう風の知らせとなり、わたしは、固く閉じられた瞳の奥の、黙して語ることはない彼らの記憶のかたわらにたわむれているエコーになる。いくつ

もの過ち、取り返しのつかない過ち、忘れてしまうことすらできない過ち。そのかたわらをこだまとなって吹きまとい、あるいは遠い潮のひびきとなって静かに満ち寄せ、今まさにそれをしようとしている男たちに、わたしは息を吹きかける。いいえ、だめ。あなたはそれをしてはいけないわ。いいえ。ちがうわ。そうではないの。あなたはそんなひとではなかったはずよ。そして流れることをやめて滞ったままの記憶、固い結び目のなかにとらわれた記憶、纏れたままほどけない記憶の糸を静かにひもとき、忘却へと、すべてを忘却の淵へとわたしはみちびいてゆく。そこにわたしがいたということまで含めて。

本当におまえは馬鹿な女だな。人が良すぎるにもほどがある。扉の陰から身を起こしてジャガーは言う。まったくくでもない連中さ、と。薄汚れた廊下の壁を背にしてジャガーは言う。どうせなら連中の汚らしい手に少しだけおまえの胸を触らせてやって、ちよつぴりいい思いを味わわせてやって、たんまりお布施をいだいたほうがよっぽどましっていうもんだ。手に持った齧りかけの林檎を窓から投げ捨てジャガーは言う。おまえがいくら連中の汚らしい思い出をきれいにしてやっても、どれほどきれいに記憶の染みを掃除してやったとしても、あの馬鹿な連中、おまえのことを少しも覚えちゃ

いないんだからな。まったく、頭の弱い野郎でもないのに礼のひとつも言えやしねえ。そう言っただジャガーはわたしを廊下の壁に押し付ける。そして嫌がるわたしの顎を摘み上げ、ひそかに顔を近づけて言う。見てみるよ、と。やがて部屋の扉が開き、恰幅のいい初老の男がわたしたちの横を通り過ぎる。先ほどまで思いつめた表情でわたしを見つめていた男は、扉の横にいるわたしたちをまるで薄汚い獣のつがいでも見るような眼で見て、ホテルの廊下を人ひとりいないロビーへと急いでゆく。そして角のところまで振り返り、もう一度わたしたちを軽蔑した眼で見る。ふん。やってられねえな。ジャガーは言う。

憶えているだろう、デルタ。ヘスペリアがこんな薄汚れた見かけ倒しの場所になる前のことを。希望に満ちた歓呼の声に見送られて、俺たちが初めてヘスペリアに乗り込んだときのことを。新しい希望、新しい未来、西の果てに輝く新しい希望の天地。ところがどうだい。ヘスペリアの母カサンドラはたちまちのうちに死んでしまった。少しはましなデイエゴ・ナツシユは何もしないうちに殺られてしまった。永く続く灰の日々。冷たい雨、遠い海鳴り、昇っては落ちる太陽。連中は希望という希望をすべて根絶やしにして何もかも忘れてしまうのさ。ヘスペリアに蔓延する植民地性の憂鬱になんて

気付きもしない。おまえのところに来ては漠然とした不安を解消してもらい、俺のところに来ては悔恨を帳消しにしてもらい、理由の定かでない不安の因つて来るころなんて知ろうともしない。なあ、デルタ。俺たちにはもっと高尚な目的があったはずだぜ。ジャガーはそう言っただけでわたしに顔を近づける。ふん。なかなか良い面になっただけじゃないか。ジャガーはわたしにくちづけをしようとする。いいじゃないか、オルコット・モーガンのところへ行ってきたばかりなんだろ。俺にも少し分けてくれよ、と。そして瞳を瞑らせ、唇をかさね、膝がふるえるまでわたしを吸って、途方もなく多くを奪い去ってゆく。

身も心も疲れ果てたヘスペリアの女は電気羊の夢でもみるのだろうか。格子の降ろされたホテルの飾り窓には埃の被った小物、女好きのする小道具が並べられ、安っぽい縁取りを従えて、眉の薄い女が口紅を持つたまま凍りついている。少し開いた唇から洩れるため息も埃を被って凍りついたままだ。いつたいおまえはいつからそこにいるの。五年、十年、それとも数百年。おまえの肩に降りかかる時の滴もおまえを流し去ってはくれないんでしょう。永遠に続く内省の時間、永遠に続く孤独の時間に、きつとおまえも陰惨な囚われ人となっているのね。君にとてもよく似合うよ。君なら何でも似合うと思

う。怪訝そうな顔をして振り向くわたしにヴィヨンは言う。どんな色の口紅だって君にはよく似合うさ。とても肌がきれいだから。それにしても、とヴィヨンは続ける、君は足が速いね、と。おそらくは貧しくて口紅も満足に買えない可哀想な娘が、思いつめて飾り窓を覗き込んでいるとでも思ったのだろうか。この男のこの単純、この男のこの無知、この想像力の欠如がわたしをとても幸福にした。わたしは男を見上げる。ヴィヨンは微笑んで言う、いつか買ってあげるよ、と。おそらく傍から見れば、貧しい恋人たちが肩を寄せ合い、幸福な甘い約束を交わしているように見えるだろう。わたしは言う。約束ね、と。

またたく間に灰になっていった男たちが死の間際に見た光景をわたしは知っている。残された女たちが毎夜のように魘うなされる悪夢と目覚めてから襲われる孤独の永い時間をわたしは知っている。選択を誤った指揮官が囚われる海溝よりも深い苦悩と明けることのない自責の夜々をわたしは知っている。暗い夜。灯りの消された部屋。毛布を掛けてくれる人もなく足先から凍えてゆく身体。デルタ。デルタ。誰かデルタを呼んで来てくれ。アルバロ・ペレスの様子がおかしい。中から鍵を掛けたままいくら呼んでも返事をしない。衛兵。衛兵。ペレスの部屋の錠前を破れ。アルバロ。目を覚ましてくれ。

アルバロ。おまえはいつたい何をしたのだ。俺たちを残していつたいおまえはどうするつもりだったんだ。デルタ。デルタはまだなのか。早くデルタにペレスを診させる。慌しい足音。息を詰めて見守る人々。暗い夜。暗い夜。息を吹き返すことのないアルバロ・ペレス。もはや脈打つことのないペレスの心臓。もういい。ドック、デルタを止めさせる。止めさせないとデルタが逆に殺られてしまう。構わん。続けさせる。デルタに代わりはいるが、アルバロ・ペレスに代わりはいない。そうして、アルバロ・ペレスの額に指をさまよわせたまま、最後から十七番目のデルタはやがて動かなくなってしまう。

このようにしてヴィヨンと会う機会が増えるにつれて、ヴィヨンとわたしの小さな約束はふたりだけの小さな果実を実らせていった。ヘスペリアの冷たい風土には生育するはずもないと思われていた植物がわたしの窓辺にかすかに芽を吹き、小さいながらも緑を深くして、わずかではあるが確実な実りを結んでいった。銀紙で包まれた卵型の菓子、古びた化粧品、箱に入った粗末な食料、または配給のチケット、ヴィヨンが描いたわたしのスケッチ、あるいは毛布の切れ端で出来たちっほけな人形、これらの小さな贈り物は、まるで窓辺の鉢植えのように、何もない部屋に色鮮やかな色彩を放ち、日

がな注がれるわたしの視線を浴びて豊かに育っていった。ほとんどわたしには使う機会のないこれらの品々は、ヴィヨンの面かけを内に秘め、夜になれば暖かい光でわたしの部屋を明るませてくれる。あるいは窓辺の小さな防波堤となり、わたしを水浸しにして終わりのない省察へと駆り立てる、わたしたちの忌まわしい性癖からわたしを堅固に守ってくれる。おしなべて眠りというものを知らないわたしは、夜ごとこれらの小さな果実にたたまれた記憶の襞をひもとき、匂いたつように立ち現れる永遠の瞬間に、幾度となくわたしを融け込ませてゆくだろう。たとえかりに明日ヴィヨンと会う約束があったとしても。

葉ずえのかたわらで息を吐く。雨のしずくに
ふるえる葉ずえのかたわらで息を吐く。軒をつたい、窓
をつたい、遠々しいこだまを窓辺にさまよわせて息を吐
く。あるいは男の額に冷たい指をさまよわせてその耳も
とに息をはく。そして照れたようにはにかむ男の腕に寄
りかかり、顔を見上げて楽しそうに微笑んでみたり、耳
元でくすくす笑ってみたり、あるいはいたずらっぽく身
を寄り添わせたりしながら、わたしはつかのま、とうの
昔に死んでしまった恋人になる。悲しみに囚われた男の
忘れられない女になる。二度と会うことすらかなわない
思い出の女になる。そして懐かしそうに微笑む男のから

だに身を寄り添わせ、ふたりでよく歩いたヘスペリアの
街を行きながら、ときどき思い出の場所で立ち止まって
は、あのとときしたあのをりようで口づけをする。あのと
きさまよわせたあのままざしで男を見つめる。二度と交
わされることのないあの幸福な口づけをする。すべてが
悦びに満ち、何もかもが信じられないほど幸福な諧調の
もとにあつた、あのとときのあの忘れられない口づけをす
る。そして別れる時間が来てもなかなか別れたがらない
男の手を取り、わたしは言うだろう。まるで真率な打明
け話をするようにわたしは言うだろう。ねえ、よく聞いて。
わたしが死んだのはあなたのせいではないのよ、と。

ただ腕を組んで歩くというそれだけのことがこれほどわたしを幸福にしようとは。ヴィヨンと交わす取り留めのない会話、たとえば通り過ぎた小猫が青い眼をしていたとか、茶色い毛並みをしていたとか、あれはきつと捨て猫にちがいないとか、そういう他愛のない会話がこれほどわたしを満ち足りた気分にしようとは。旧市街の外れにある古びた建物の、今にも崩れそうな階段の暗がり、貧しい恋人たちの秘密の部屋になるにはそれほど時間はかからなかった。割れた窓から珍しい植物が生い茂る植物園の中庭が、恋人たちのもうひとつの部屋になるにはそれほど時間はかからなかった。他に人

がいなければそこでもわたしたちの部屋になった。中庭の片隅で、あるいは階段の暗がり、ヴィイオンは言う。口づけをしたい、と。または廊下の突き当りで言う。接吻をしたいと。わたしは答えるだろう。もう少し待ってほしい、と。厭な思い出があるからなどと嘘をつく。そのかわり胸に触ってもいいと言う。脚に触れてもいいと言う。もつと近くに来てもいいと言う。でも服は脱がさないでくれとわたしは言う。裸は見られたくないのだと。触れてほしくない傷痕があるからと。でも愛していることに変わりはないのだとわたしは言う。ヴィイオンは困り果てて言うだろう。注文の多い恋人だ、と。少し笑って。

湿気た部屋だね。まるで女の腐ったように空気がまとわりついてくる。まさに勘違いしていることに気づかないまま、騙されてばかりいる馬鹿な女の部屋だね。それにしても、と冷淡にわたしを見てジャガーは言う。いったいおまえは同じ過ちを何度繰り返せば気が済むんだいと。いい加減俺に面倒をかけないでくれな
いか。うんざりなんだ、と。そして窓辺に飾られたスケッチを軽蔑した眼で見る。いいかい、デルタ。俺たちにはしてはならないことがある。俺やおまえにはあらかじめ許されていないことがあるんだ。初めから禁じられていることがな。悪いことは言わない。大事に至らない

ちに諦めるんだ。おまえは恋なんてしちゃいけない。人を好きになっちゃいけないんだ。そう言って再びわたしを軽蔑した眼で見る。それが、いつもやっているように、テーブルに脚を開いていい思いをさせてやりな。あるいは素裸になって、おまえのからだを見せてやりなよ。俺たちが奴らとは異なるという刻印しるしをあいつに見せてやればいいのさ。ふん。どんびきするぜ。おまえの愛しいヴィヨンさまは。酸っぱい人、とわたしは言う。あなたは本当に酸っぱい人だとわたしは言う。日を追うことに劣化して酸っぱくなってゆく封を切った安物のワインのようだとわたしは言う。とても飲めた代物ではないわ、と。

デルタよデルタ。返事をしておくれ。デルタよデルタ。いるならわたしに伝えておくれ。聞いているならわたしに返事を返しておくれ。わたしたちは恋をしてはいけない女たちなのか。わたしたちに人を恋することは許されていないのか。他人の恋の思い出ばかりを山ほど抱えて、それでもわたしたちに恋をすることは許されていないのか。ねえ、お願い。わたしに伝えて、デルタよデルタ。デルタよデルタ。しかしながらこのように呼びかけても、応答を返してくれるお姉さまはヘスペリアにはもういない。たくさんいた妹たちもはやひとりとして残っていない。おそらくは、命からがら逃げ延

びたオルコット・モーガンの娘たちは、みなわたしと同じように行方知れずになったままだ。おたがい疎通を取り合う術も知悉しているのに、行方も知らせずこの街のどこかに身をひそめたままだ。髪の色を変え、化粧を変え、時には顔立ちや身体つきまで変えて、やつれた女になつてみたり、みずみずしい肢体の女になつてみたりしながら、ヘスペリアのかたわらに息をひそめている。きっとこのルパナーレのどこかにも、わたしの同族が息を殺しているにちがいない。しかし、街を見下ろしてみても誰が女であり誰がデルタであるのかは、おそらく誰にもわからない。言い得べくんばみな等しなみに女である。

その日のヴィヨンは不機嫌だった。長い間待たせたあげく、わたしを冷たくあしらった。そのくせ叱られた子どものように黙り込んで、始終不貞腐れてばかりいた。恋人たちが頬を寄せて交わす甘い会話にも応じる様子はなかった。見つめ合うまなざしは流れがちで、彼の恋人のもとに優しく委ねられたり、彼女を暖かく包み込んだりすることはなかった。そうして永く続いた沈黙の末、突然顔を上げてヴィヨンは言った。見たのだと。意を決したようにわたしを見てヴィヨンは言った。見たのだと。旧市街のはずれで見たのだと。まるでいかがわしい女のように咽喉をのけぞらせて接吻しているところ

を見たのだと。膝をかくかく慄わせながら男と接吻しているところを見たのだと。それは違うわ、とわたしは言う。あなたは間違っているかとわたしは言う。大きな勘違いをしているわ、と。あなたが見たのは兄と妹のささやかな交換、他に身寄りのない兄妹がパンの欠片を分け合うような貧しい愛の交換なのだ。他の誰にも明かせない夢や希望を夜すがら分ち合うような、貧しい兄と妹の交換なのだ。本当にわたしが愛しているのはあなたなのに、と。接吻すら許してもらえない僕はいつたい君の何なんだろうかとヴィヨンは言う。わたしは言うだろう。わたしに接吻したら、あなたに災厄が伝染するわ。

こう考えてくれないかしら。かりに恋人たちにおたがい明かせない秘密や偽りがあるとすると、それは愛ゆえになされる偽りなのだと。かりにわたしがあなたに打ち明けていないことがあるとするなら、それはあなたを愛するがゆえになされる秘密なのだと。いつの日かわたしはあなたにすべてを話すでしょう。あなたの額に指をさまよわせ、もしかしたら永らく拒んできた口づけを与えて、それまでの幸福な日々を振り返りながら、わたしはすべてを話すでしょう。まるでアルバムをめくりながら幸せなときを振り返るように、わたしはあなたに話すでしょう。それまではどうかわたしの秘密を愛す

る者の美德だと考えて欲しいのだ。わたしの偽りを愛の真実と受けとめて欲しいのだ。その頬に吐息がかかるまで顔を近づけてわたしは言う。もはや離れられないほどヴィヨンにからだを寄せてわたしは言う。丈高い植物や珍しい草花の蔭にふたりの影を隠してわたしは言う。やがて、ヴィヨンの温かい指先がわたしの頬に触れる。ややためらいがちに耳朶に触れたそれは、おそらく口づけしたいのを我慢して、髪から眉の輪郭を緩やかにたどる。そしておもむろにそこに接吻を与えると、つくづくわたしを見てヴィヨンは言う。男たちの知らない所で女たちが密かに描く人工的な眉はかえすがえすも美しい、と。

感じることを知らない女が慰藉の気持ちから
する快樂の表現はわたしを女らしい幸福の感情でいつぱ
いにした。少しずつ慌しくなるヴィヨンの吐息がわたし
の胸に触れ、そこに口づけを与えて肩からドレスを脱が
せたとき、わたしは、わたしたちには許されていない幸
福というもの、あるいはわたしたちには禁じられている
愛の悦びとは、実は誤って教えられた錯誤の記憶ではな
いか、とふと思った。あるいは、まるでおとぎ話のよう
に、わたしに掛けられた意地悪な魔法がヴィヨンの接吻
で瞬く間に解け、わたしは本来わたしのあるべき姿に戻
れるのではないかと思った。そのような奇跡の瞬間が今

まさに訪れるのではないかとわたしは思った。と同時に、
わたしの持っている秘密という秘密がすべて雪のように
溶け、なにもかもが水泡に帰してしまいかもしれないと
わたしは思った。ヴィオンはわたしの肌に口づけをする。
その手を脚に這わせてわたしの胸に口づけをする。わた
しを俯せにして薄いドレスをすべて脱がそうとする。と、
その手が止まる。そしてわたしを見つめる。そこにはこ
う印されているはずだ。デルタ。オルコット・モーガン
社。2685年製造。わたしの虫食いの果実の虫。ヴィ
オンはわたしを見つめる。ヴィオンはわたしを見つめる。
そして言う。デルタ、おまえは人間ひとではなかったのだね。

わたしたちに神がいるとするなら、それはやはり機械仕掛けの神なのだろうか。それとも失った足のかわりに機械の足を引き摺るびつこの神なのだろうか。ヴィヨンはわたしを見つめる。そして言う。デルタ、おまえは人間^{ひと}ではなかったのだね、と。おしなべてわたしたちデルタには、感情というものを制御する術が備わっている。感情を司る知能のありようがヴィヨンたちとは異なる。喜びだとか悲しみだとか、あるいは演算される喜びだとか悲しみの写しだとか、わたしたちに与えられた人工のそれを制御する術にわたしたちは精通している。わたしの心臓は慄えることはおるか、弾むことも知らな

いし、動悸を打つことすらしない。要するに、わたしはよくできた女というものの複製、わたしのそれは解析され、しかるのち演繹された感情というものの写しなのだ。だからわたしは叫んだりしない。馬鹿な女のように感情に任せて愚かなことを口走ったりしない。わたしはこの土地に相応しい冷たい女なのだ。わたしは言う。茫然とわたしを見つめる男に、わたしは言う。だから言ったじゃない。体温が低いからといってわたしのことを軽蔑しないで。だから言ったじゃない。あなたは本当の女を相手にしたほうがいい。あたしなんかは構っていないで本物の女を相手にした方がいいに決まってる。て。

ヘスペリア。ヘスペリア。冷たい土地ヘスペリア。故国から何百光年も離れて虚空をさまようわたしたちのヘスペリア。太陽なんてどこにもないのに太陽の幻を太陽と呼んでいるわたしたちのヘスペリア。どこを探したって海なんて欠片もないのに海洋の廃墟を海と呼んでいるわたしたちのヘスペリア。巧みに造り做された約束の土地。数世代の果ての行き止まりの街。馬鹿な男が複製された女に恋をする見かけ倒しの街。機械仕掛けの女が自分を見失って男に入れあげるジオラマの街。わたしは言うのだろうか。おまえたちがヘスペリアと呼ぶ約束の地は、はるか昔に軌道を外れて虚空をさまよう巨

大な箱舟の残骸なのだと。行く先を見失ったおまえたちが、失った希望の代わりに、植民船のなかに作り上げた希望の廃墟なのだと。再現への果てしない憧れと騙されやすいおまえたちの感官が巧みに作り上げる見せかけだけの街なのだと。至る所に広がるアンフラマンズな遠方のなかに延展する街並み、街の奥行きを膨らませる透過性の光学ジオラマ、破船の天井に昇っては落ちるおまえたちの廃墟の太陽。かつて新しい希望に胸を躍らせてヘスペリアに乗り込んだ故郷の人々のことをおまえたちは知らない。破れた船の裂け目から一瞬にして揮発した人が思い描いていた未来のことをおまえたちは知らない。

BUY DELTA

デルタ型アンドロイドの禁じられた恋を描く『CALLAS CENQUEI FEMMES #2 DELTA』この美貌のメカニカル・ガールのあまりにも純情な恋の行方は。希望の廃墟と化したヘスペリアの希望とは。この恋する女が語る「接吻で伝染する死の病」とは。読者の予断を許さないカラス・センクエイ・ファム第二弾『デルタ』正規版を購入して、この驚きに満ちた作品の続きをご覧ください。ヴィヨンよヴィヨン。おまえたちが太陽と呼ぶ、あの太陽の廃墟の太陽の、ファーレンハイト百分の一度の乱れがわたしの心臓を慄わせる。おまえたちが海洋と呼ぶ、あの海洋の廃墟の海洋の、高まって高まって高まって碎ける波の慄えがわたしの心臓を慄わせる。

- [ご購入いただく製品の案内](#)
- [ご購入のお申込み](#)
- [オフィシャル・デモのダウンロード](#)